



Title	編輯を終へて
Author(s)	山本, 檣信
Citation	懷徳. 1937, 15, p. 89-91
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/88992
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

詩吟などありて盛會であつた。尙席上、吉田先生より三宅石菴、井上赤水等當地先賢の遺文事蹟蒐集事業に就き援助を求めらる。

▲八月十四日

高野山に登りて一泊の計畫は、支那事變の爲め中止する。

編輯を終へて

山本檣信記

日支の戰雲愈急を告ぐるに至り、出征軍人を送る歡呼の聲は巷に満ち、我が勇猛果敢なる將兵は、大陸の曠野に身命を抛つて戰闘してゐる。一旦刀を抜いた以上敵を殲滅して抗日意識を挫折喪失せしめ、以て支那四億の民衆に、神國日

本の有難味を徹底せしめねばならぬ。放蕩息子
を打ち懲ずのは親の大慈悲である。斷じて行へば鬼神もこれを避け、正義の利劍を振り翳す王師の嚮ふところ敵はない。されど熱し易く冷め易きは私の弊、油斷は大敵である。難關突破にて、上下一致、堅忍持久の精神を以て邁進せねばならぬ。今や我が國民は協同一致、君國の爲に喜び勇んで生命がけの御奉公を抽んで居る。歐亞を席卷して天下に君臨せし支那民族の氣宇、今、何處にありや。朝には英に媚び、夕には蘇に援を求むる卑屈根性を停止せよ。我が日本國民の根本的心情は何であるか、亂脈施す處なき支那を救済して、王道樂土たらしむるを念願する以外他意なきことを眞に能く反省し、而して統一覺醒せられたる支那民衆の國家觀念

から輝き出づる道徳的、宗教的光明によつて、堯舜以來の支那國民自身の本心、及び兩國民の將來の本當の關係を深く落着いて考察せねばならぬ。我々は双方とも成るべく其の犠牲を拂ふ事少くして、共存共榮の大義によつて、我が國と堅く相提携し、戮力協力日本支那印度を包含する東洋の平和から更に進んで、世界平和の事業に迄乗り出し行くならば、陰慘なる爭鬭とは全く趣きの變つた輝かしき光明が其處から現はれて來ると思ふ。唇齒輔車の關係にある兩國民が相戰ふことは、相互其の力を弱めるばかり、夫婦喧嘩を喜ぶアングロサクソン爺やソビエットロシア婆の思ふ壺にはまることで、東洋の將來を思ふと誠に寒心に堪えない。實に兩國民過去三十年の關係は殆ど全く文化的、平和的交際である

ことを思ひ、兩國民の生活の安全と福祉の増大とに力を致し、東洋文化を發展せしめ東洋平和を確立する目的達成の爲めに、一意報公の誠を竭し、以て宸襟を安んじ奉らんことを期せねばならぬ。我々は千載一遇の此の重大時局に遭遇し、天壤無窮の皇運を扶翼し奉りて皇威を中外に宣揚するは誠に光榮とするところである。或る意味に於ては、儒教の精神も道教の精神も佛教の精神も、現在に於ては、其の發祥の源流の地たる支那印度よりも、却つてより多く我が日本に生きて居ると云はれる。我々は日夜聖賢の書を讀み、智能を啓發し德器を成就することとを以て第一の目的としてゐる。茲に支那文化の根本思想を闡明せられた武内義雄先生の講演筆記と、本會の事業に深き理解を有せらるゝ支

那哲學界の權威高瀬武次郎先生、並に我が國經濟學界の權威作田莊一先生、國文學界の權威阪倉篤太郎先生の論説を掲げ、また本會事業の一たる史蹟踏査を指導せらるゝ國史學界の權威中村直勝先生の臨地講演の一つを載せて其の面目を髣髴たらしめ、また鈴木虎雄、秋月胤繼兩先生を初め會員の文藝を錄して其の修養に資し、また舊懷德堂の昔を偲ぶために中井碩果先生の談話を筆記せる懷德堂夜話を附録として、本誌を刊行することになったのは、是れ全く諸先生御援助の賜である。我々は日常繁忙の業務の餘暇に編輯した爲め、校正其の他に缺點多々あるべきも、特に御容謝を懇願する。國家多事にして國民の責任は愈々重大性を加ふるの秋、偏に會員諸君の御健康と御奮闘を切望して止まぬ。